宮崎市文化財調査報告書第63集

高岡麓遺跡（25地点）

高岡小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第63集

高岡麓遺跡（25地点）

高岡小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

宮崎市教育委員会

序　文

この報告書は、高岡小学校建設工事に伴い、平成16年度に実施した高岡麓遺跡25地点における埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

この調査により、中世から近代にかけての遺物や遺構が確認され、特に近世の高岡麓における地頭仮屋を解明するうえで多大な成果をあげることができました。

この発掘調査で明らかにされたものは、先人が残した私たちの文化遺産であり、これらの成果を活かしていくことが、我々に課せられた重大な責務と考えております。本書が新市域に所在する文化財の保存に資され、また学術資料として学校教育、社会教育などに幅広く活用頂ければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり、関係各者より頂いたご指導とご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

平成18年３月

宮崎市教育委員会
教育長　内　藤　泰　夫

例　言

1　本書は、高岡小学校建設工事に伴い、旧高岡町教育委員会が、2004年度（平成16年度）に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　遺物の実測は、[redacted] 藤木晶子、島田正浩、製図は藤木、島田がそれぞれ行った。

3　本書のレベルは海抜高である。ただし、国土座標は旧座標を使用しており、レベルも同様である。

4　高岡麓遺跡の遺跡番号は406で、今回の調査地は第25地点にあたる。また、遺物の注記は、「遺跡番号－層位－取上番号」を基本とし、遺物は宮崎市高岡調査所に保管している。

5　本書の執筆は、Ⅲを今城正広、その他は島田による。

6　本書は、平成18年1月1日に高岡町と宮崎市が合併したことにより、宮崎市教育委員会が刊行した。

目　次

本文目次

Ⅰ　序　　章 …… 1
　第１節　はじめに …… 1
　第２節　遺跡の環境 …… 2
Ⅱ　調　　査 …… 6
　第１節　調査概要 …… 6
　第２節　遺構と遺物 …… 8
　　１　第１区の調査 …… 8
　　２　第２区の調査 …… 18
　第３節　文献史料 …… 19
　　１　文献史料から見た地頭仮屋 …… 19
Ⅲ　まとめ …… 21

図版目次

第１図　遺跡分布図 …… 2
第２図　高岡麓遺跡調査位置図 …… 5
第３図　高岡麓遺跡25地点調査区位置図 …… 6
第４図　第１区遺構配置図 …… 7
第５図　1・2号建物跡遺構実測図 …… 9
第６図　３号建物跡遺構実測図 …… 11～12
第７図　1～6・8号土坑遺構実測図 …… 13
第８図　7・9号土坑遺構実測図 …… 14
第９図　９号土坑出土円礫等実測図（1） …… 15
第10図　９号土坑出土円礫等実測図（2） …… 16
第11図　９号土坑出土円礫等実測図（3） …… 17
第12図　第２区遺構配置図 …… 18
第13図　出土遺物実測図 …… 19

写真図版

図版１　文久3年御仮屋麓図、高岡小学校の校庭（昭和14年頃） …… 21
図版２　高岡麓遺跡中心部 …… 22
図版３　第１区全景 …… 23
図版４　第２区全景、１号土坑、２号土坑、４号土坑、５号土坑、６号土坑、８号土坑 …… 24
図版５　７号土坑、９号土坑 …… 25

表目次

表１　９号土坑出土礫観察表 …… 17
表２　報告書登録抄 …… 25

Ⅰ　序　章

第１節　はじめに

１　調査に至る経緯

高岡町教育委員会では、学校教育課教育総務係において学校教育施設の耐震調査を実施しており、高岡小学校においては耐震において問題があることがわかった。そのため、高岡小学校校舎の改築等の必要がでてきた。

高岡小学校は、近世における高岡麓の政治的中心であったところに立地しているが、その中心的建物である地頭仮屋等の施設の配置がどうであったのか、正確な場所を記した記録は見つかっていない。高岡町教育委員会社会教育課は、そのような確認も必要であるとの判断から確認調査を３回に分けて実施した。第１回目は平成15年３月11日に校舎の南側にある花壇周辺を対象に実施、第２回目は７月29日～７月31日の日間で体育館周辺と運動場西端を対象に実施、第３回目は平成15年10月27日に運動場の中央から東側を中心に実施した。その結果、体育館と運動場の間の花壇周辺は、１ｍ以上の盛土がなされており、地山付近から旧校舎と思われる建物の基礎が確認された。運動場の東側ではピットが確認され、西端では近世の遺物が数点出土した。このような確認調査の結果をもとに、学校教育課に対し、花壇周辺と運動場における工事は文化財保存の処置が必要であることを伝えた。

その後、運動場を中心に校舎を建築することが決まったため、再度協議を行った。当時、計画に不確定な部分があり、遺跡が影響を受ける範囲は確定されたものではなかったが、基本計画が大きく変わるものではないことから、確実に遺跡が影響を受ける範囲を限定して記録保存を目的とした発掘調査を平成16年７月26日～11月29日に実施した。

２　調査組織

調　査　　2004年度（平成16年度）

高岡町	教　育　長	中山　芳教
	社会教育課長	小岩崎　正
	社会教育係副主幹	上地由紀子
	文化財係長	島田　正浩
	主　　事	藤木　晶子

整　理　　2005年度（平成17年度）４月～12月

高岡町	教　育　長	中山　芳教
	社会教育課長	永尾　武士
	社会教育係副主幹	上地由紀子
	文化財係長	島田　正浩
	主　　事	藤木　晶子

2005年度（平成17年度）１月～３月

宮崎市	教　育　長	内藤　泰夫
	文化振興課長	野田　清孝

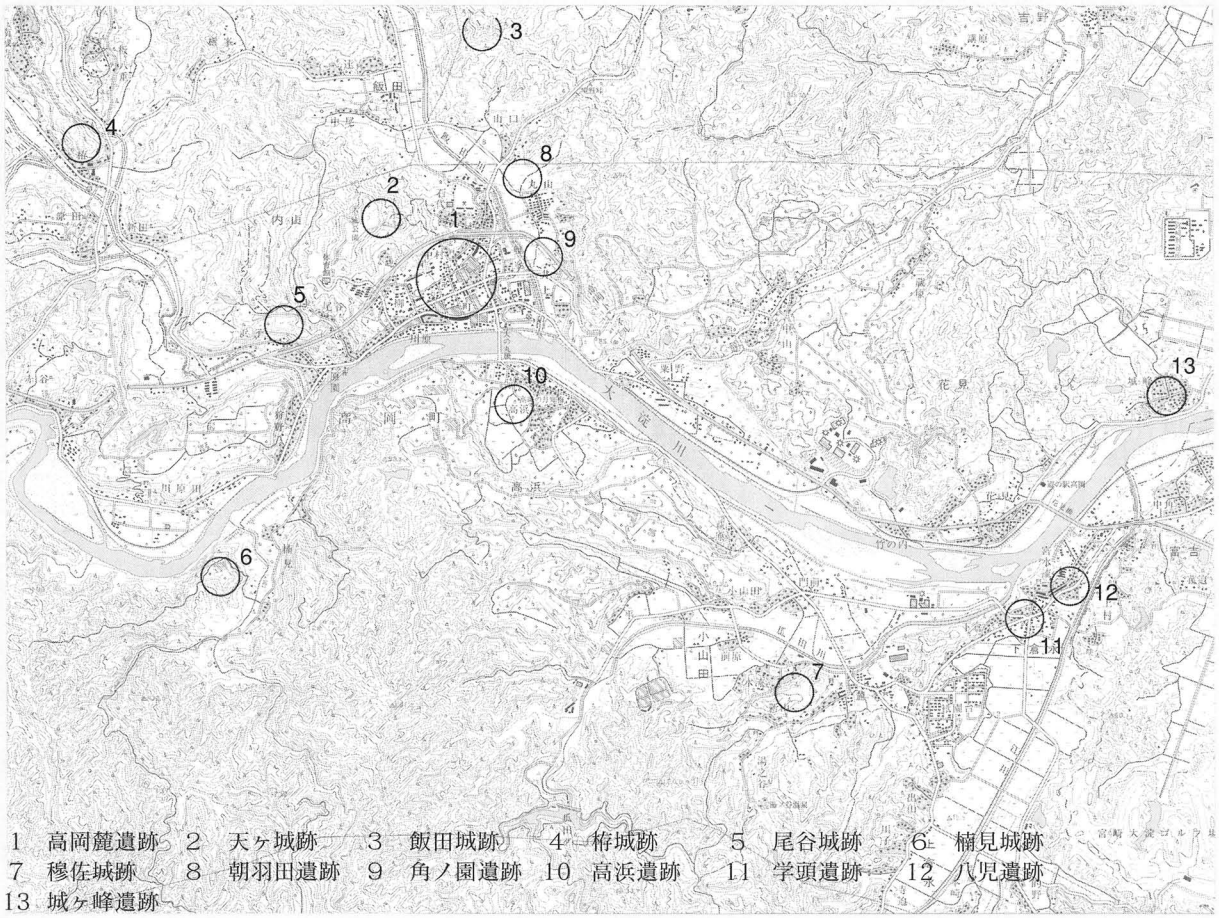
文化振興課長補佐	永井　淳生
文化財係長	米良　明信
主　　査	島田　正浩
主任主事	今城　正広
主任主事	松木　勇道
主　　事	藤木　晶子

また、この調査を実施するにあたり、高岡小学校等の関係機関をはじめ、地元の方々などのご理解とご協力を頂いた。

第２節　遺跡の環境

1　自然環境

宮崎市高岡町は山林が70％以上を占める。その町中央を蛇行しながら大淀川が東流し、それによって形成された河岸段丘からその東側に広がる宮崎平野を一望する。この大淀川に起因する自然環境が大きく人々の生活、しいては歴史環境にも影響を与えていた。このような地形を形成する地質について、「高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層



1　高岡麓遺跡　2　天ヶ城跡　3　飯田城跡　4　椨城跡　5　尾谷城跡　6　楠見城跡
7　穆佐城跡　8　朝羽田遺跡　9　角ノ園遺跡　10　高浜遺跡　11　学頭遺跡　12　八児遺跡
13　城ヶ峰遺跡

第１図　遺跡分布図

中には塩基性岩類に伴って、厚さ１ｍ～２ｍのチャートが見られる。高岡山地西部には、古第三紀の四万十累群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合の覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や暖斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。」（高岡町埋蔵文化財調査報告書12集より抜粋）としている。

この遺跡は、天ヶ城跡の南裾に広がる大淀川と飯田川の合流地点に形成された沖積地に存在する。海抜高は約12～17ｍ程で、東側の旧飯田川付近が低く高岡小学校付近が高くなる。大淀川河岸から北側へ150ｍ程までの地盤は砂地で、そこから１段高くなって弱砂性の粘土層が広がる。遺跡の範囲は、基本的に近世の高岡麓を形成した範囲としている。具体的には、東側は旧飯田川を東端とし、西側は浜子地区までで尾谷地区も含む。北側は天ヶ城跡を境とするが、天ヶ城跡の東側は高岡中学校の南側までとする。そして、南側は大淀川河岸までとする。

２　歴史環境

宮崎市高岡町域の遺跡は現在140箇所以上あり、そのほとんどは河川により形成された台地上に位置しているが、最近では低地でも遺跡が確認されている。

旧石器時代

調査は高野原遺跡、向屋敷遺跡、押田遺跡、永迫第２遺跡、小田元第２遺跡で実施されている。高野原遺跡と永迫第２遺跡ではAT下位層が調査され、高野原遺跡からはAT火山灰土層より上位層でナイフ形石器が、下位層（黒色帯）でラウンドスクレイパーが出土している。AT上位層の調査については、向屋敷遺跡では集石遺構とともにナイフ形石器が出土した。また、五女木産の黒曜石が１点のみ確認されている。小田元第２遺跡では　細石刃や細石核、角錐状石器、ナイフ形石器、剥片尖頭器等が出土している。また、小田元第２遺跡と押田遺跡から国府型のナイフ形石器が確認されている。

縄文時代

この時代は調査例が多く、草創期も含めてすべての時期で確認されている。なかでも早期の調査例は多く、天ヶ城跡をはじめ、小田元第２遺跡、橋山第１遺跡、橋上遺跡、八久保第２遺跡、榎原遺跡、中原遺跡、高野原遺跡などで調査されている。天ヶ城跡では、押型文土器と桑ノ丸式土器が大半を占め、その両者の折衷土器も出土している。永迫第２遺跡では、アカホヤより下層から轟木１式と共に　状耳飾りが出土した。石器石材では、交易圏を考察する資料となる黒耀石は九州島各地のものが出土しておりデータの蓄積をおこなっている。また、サヌカイトにおいても、多久産の他に金山産のものが出土している。早期の遺構については、集石遺構と陥し穴状遺構が中心で住居跡は検出されていない。高野原遺跡では、縄文早期の陥し穴状遺構が確認された。また、永迫第１遺跡では、同様の陥し穴状遺構と共に石器生産を思わせる剥片の出土状況が確認された。前期は久木野遺跡第１区、永迫第１遺跡、永迫第２遺跡で包含層から轟Ｂ式や曽畑式が出土している。中期は去川山下遺跡から春日式、久木野遺跡で春日、大平、岩崎下層の各形式のものが出土している。後期は橋山第１遺跡で阿高系の土器や疑似縄文の

土器が出土した。さらに久木野遺跡では円形竪穴住居跡とともに北久根山式が出土している。城ヶ峰遺跡では市来式や北久根山式が出土した。的野遺跡からは綾式を含む疑似縄文の土器が出土した。また、表採資料ではあるが山子遺跡、赤木遺跡等でも確認されている。晩期は学頭遺跡で黒色磨研土器が出土している。学頭遺跡では糸魚川産ヒスイを石材とした勾玉が出土している。

弥生時代

調査された遺跡はⅣ～Ⅴ期が中心で。期の調査例はない。標高15メートル程の微高地状のところに位置する学頭遺跡からは、断面Ⅴ字状を呈する溝状遺構や竪穴住居跡が検出された。学頭遺跡より約２km程南に位置する的野遺跡からは、Ⅳ～Ⅴ期の包含層と同時期の溝状遺構や２段掘の土壙墓が検出された。また、丹後堀遺跡からはⅢ～Ⅳ期の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代

調査は、まず、住居址の調査としては八児遺跡や高岡麓遺跡第５地点がある。高岡麓遺跡では２軒の竪穴住居跡が検出され５世紀中頃に比定されている。また、八児遺跡は側壁にカマドが付設された竪穴住居跡（７世紀代）などが12軒以上検出された。両遺跡とも標高がほぼ同じで大淀川の氾濫源である低地に位置しており、農耕集落の一端をみることが出来る。次に墳墓の調査としては久木野地下式横穴墓群がある。今まで４基の調査が実施され、人骨とともに鉄斧や玉類が出土し６世紀前半としている。また、町内には３基の県指定古墳がある。その古墳周辺で耕作中に壷が２点と鉄製品が発見されている。

古代

高岡周辺は承平年間（931～938年）の和名抄によると、その当時は「穆佐郷」といわれていた。蕨野遺跡で、大淀川北岸の丘陵（大字花見）に位置し、９世紀後半以降の土師器の椀、皿（杯）などを生産した焼成遺構が６基以上検出された。また、三生江遺跡や的野遺跡では、土師器の椀、皿（杯）などの他、越州窯系青磁碗をはじめ灰釉陶器皿・？（猿投）や緑釉陶器皿（洛西、周防）が多く出土している。また、９世紀から10世紀にかけての高台付き土師器椀の底部に放射状の条痕もしくは圧痕を残したものがあり、宮崎平野を中心とする特徴的な遺物である。三万田遺跡では、断面Ⅴ字状に近い溝が「コ」字状に検出され、溝の床面から、土師器碗等が出土している。この時期の遺跡調査数は急激に増加し、高岡麓遺跡、八反田遺跡、永迫第２遺跡等でも確認されている。

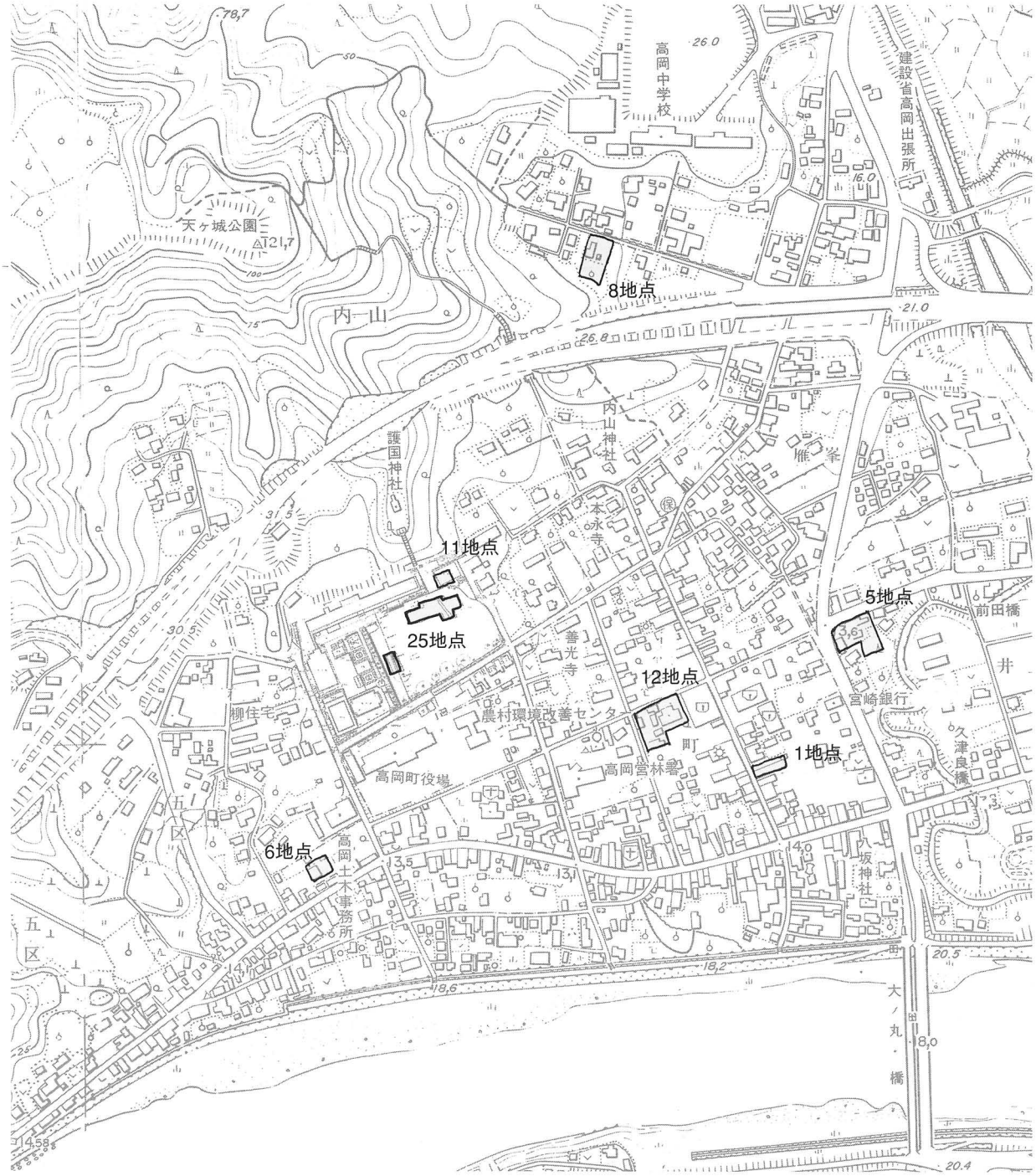
中世

建久図田帳によると高岡は、12世紀には「島津庄穆佐院」といわれていた。その後、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の対立を迎える。その中心となったのが穆佐城である。穆佐城は足利尊氏が九州の拠点としたことからはじまる。平成３年には穆佐城の縄張り調査を実施し、南九州特有の特徴をもつと共に機能分化のみられる山城であることがわかった。調査は、16年度までに８次からなる調査を実施した。その結果、14世紀後半から16世紀末までの遺物が出土しており、特に15世紀後半から16世紀末の遺物が集中している。その西側に位置する梅木田遺跡では、桜島文明軽石層に覆われた溝が検出され、木製品等が出土している。

近世

中世までは高岡の中心地は穆佐城周辺だったのに対して江戸期になると天ヶ城周辺に一変する。高岡の地頭仮屋を中心に広がる高岡麓遺跡は、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群と町屋群に分割されている。

この遺跡の本調査は、１地点、５地点、６地点、８地点、12地点、11地点、22地点、そしてこの25地点である。それ以外は、確認調査や立ち会い調査等で処置されている。まず、１地点は町屋区域の調査で、火災跡の焼土層と18世紀代の井戸状の遺構が検出された。５地点は高岡郵便局が在るところで、県教育委員会が調査をおこなっている。その結果、古墳時代後期の住居跡をはじめ、17世紀前半からの遺物も出土している。６地点は高岡土木事務所南側の個人住宅で、色絵碗が出土している。８地点は宅地分譲地で、18世紀後半の整地層が確認された。12地点は中央広場がある場所で、近世の郷士屋敷地である。初期伊万里のほかに18世紀から19世紀の陶磁器が多数出土している。未整理箇所としては、11地点はトレーニングセンターが在る所、22地点は健康福祉センター「穆園館」が在る所で、近世、古代の遺構や遺物が出土している。



第２図　高岡麓遺跡調査位置図（1/6250）

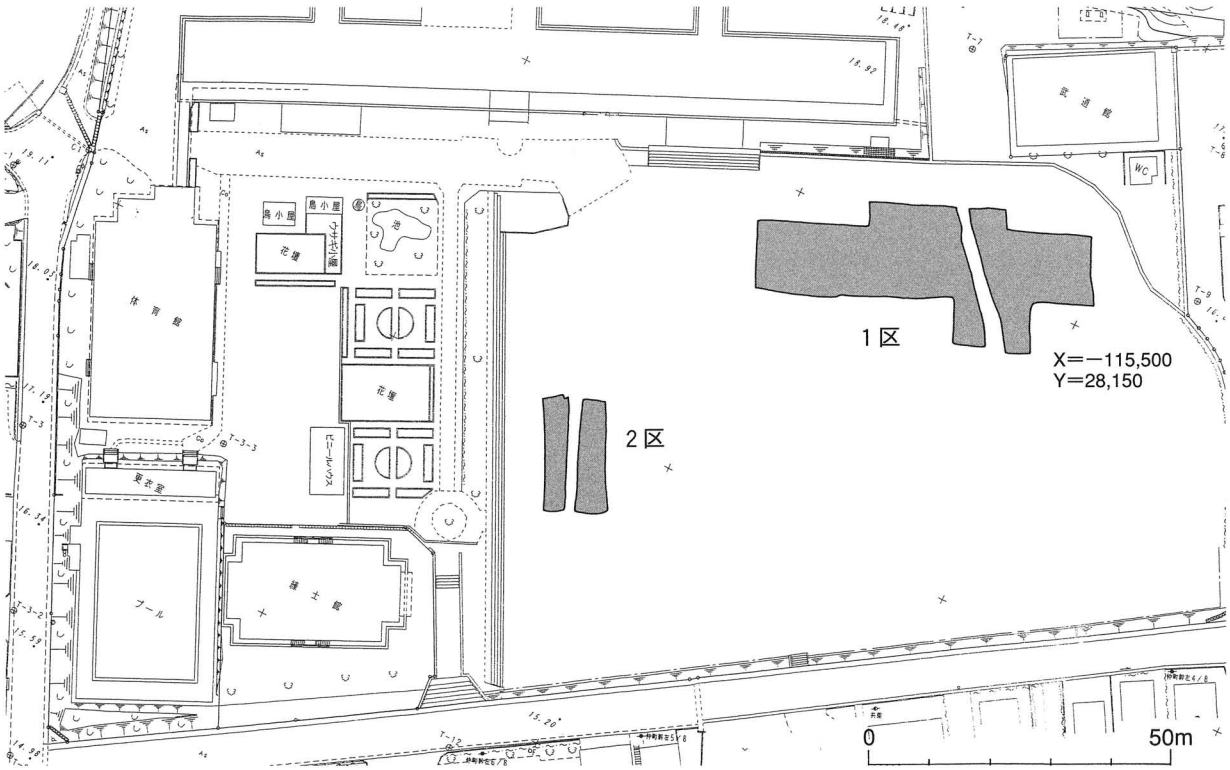
II　調　査

第１節　調査の概要

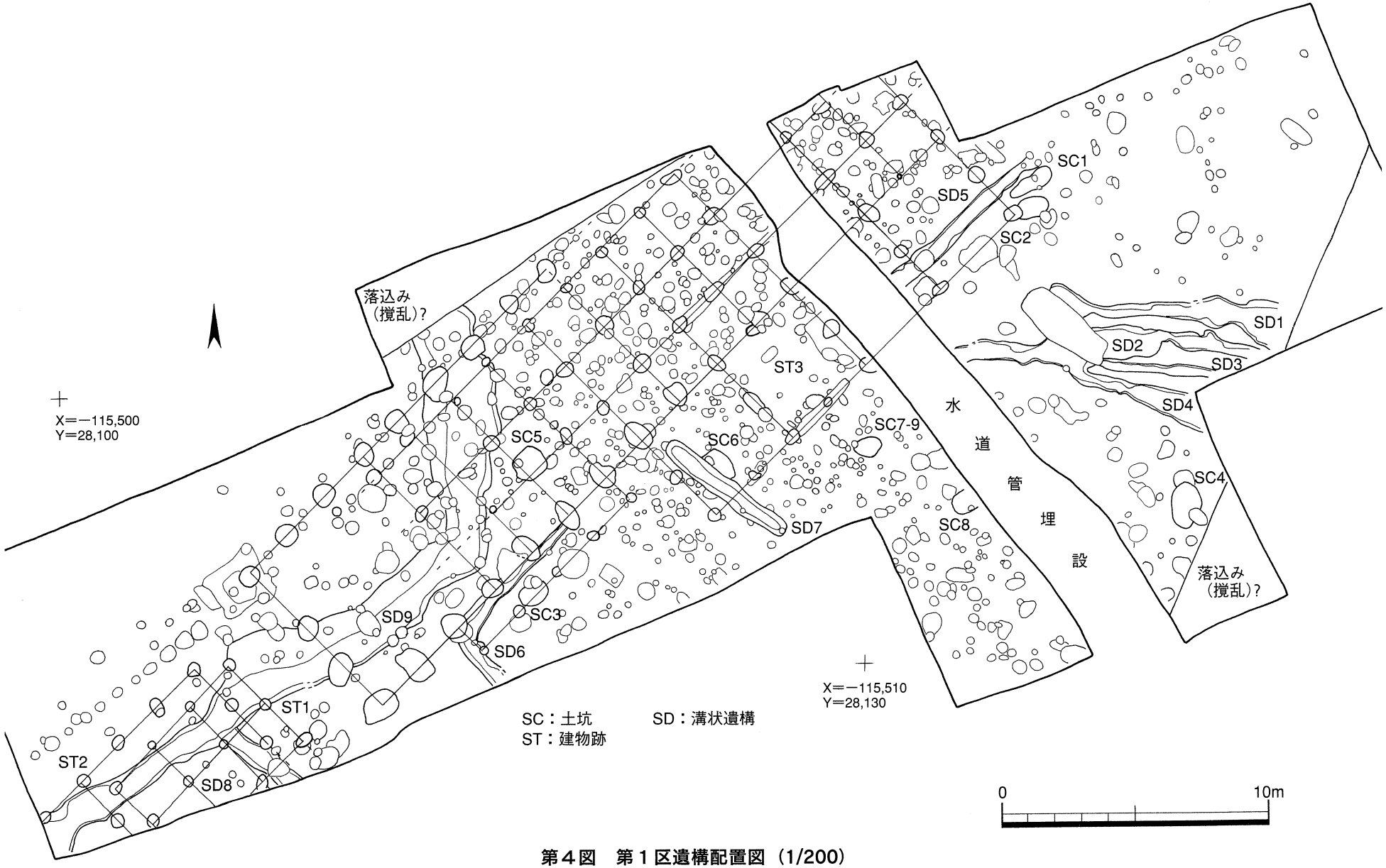
１　調査経過

今回の調査は、高岡麓遺跡としては平成16年度までに25箇所の開発地で対応しており、ここは25地点とした。

調査は、１学期終了後の夏休みから開始した。まず、調査地を運動場内の北側（１区）と西側（２区）の２カ所に分け、１区側から調査を行った。ここは、学校施設に直結する水道管が調査区内に埋設されていたことから、その場所を確定するため、東西方向のトレンチを３カ所設定した。水道管は調査区の中央を横断しており、この時期に露呈させることは好ましくないことから、水道管埋設部分を１～２ｍの幅で残し、調査をすることとした。表土剥ぎは、８月３日から実施した。表土は、西側で浅く、運動場の整地土を0.1ｍ剥いだところで遺構検出面となる。水道管よりも東側は、表土の下に、瓦礫が混ざった整地層が堆積幅１ｍを越える。その下に、中世～近世（近代？）にかけての包含層が0.05ｍ～0.2ｍの深さで堆積する。その包含層は、調査の都合により、重機（一部は人力で掘削）で地山面まで掘削した。その後東側から遺構の検出作業並びに遺構掘削を行い、空中写真撮影を９月27日に実施した。ただし、建物等の遺構掘削（全掘）はその後に実施した。さらに遺構が西側に拡がることが推測されたため、調査区を西側に約20ｍ程拡幅して、調査を継続した。再度空中写真撮影を行い１区の調査を終了した。引き続き２区の調査を11月1日から実施した。この調査区も表土である運動場整地土を約0.1ｍ剥いだところで暗黄褐色粘質土の地山面となる。11月５日機材等の撤収を終了した。その後、運動場として利用できるように廃土を埋め戻して整地後11月29日にすべての作業を終了した。



第３図　高岡麓遺跡25地点調査区位置図（1/1250）



第４図　第１区遺構配置図（1/200）

調査期間中は、度重なる台風や大雨の影響により調査区全体が幾度も水没し、廃水処置に時間を費やした。また、高岡小学校児童６年生を対象にして現場説明会を実施した。

２　調査概要

調査地は宮崎市高岡町内山2899－1の高岡小学校運動場（新校舎建設予定地）、調査面積は約930m²である。調査地は、天ヶ城の裾野に広がる麓集落の中央に位置しており、近世の地頭仮屋や幕末期に新設された錬士館（高岡小学校の前身）が置かれたとされている。地山は、西側が高く東側から南側にかけて緩やかに傾斜している。遺構は、１区で溝状遺構９条、土坑９基、建物跡３棟、ピット多数が検出されたが、遺構に伴う遺物の出土がほとんど無い。遺物は、土師器皿類、鎬連弁をもつ青磁（龍泉窯系）、茶入？（福岡産）、甕（産地不明）、瓦（平瓦、丸瓦）などが出土している。中世から近世の遺物がほとんどであるが、磁器類を主体とした近世の遺物は少ない。調査地２区はピットが数基検出された。その西隣は確認調査時の11Trがあり、陶磁器類が遺構検出面において出土した。

第２節　遺構と遺物

１　第１区の調査

１区は地頭仮屋跡の存在を想定し、運動場内の北側に調査区を設定した。調査区の東西両側に大規模な溝状？の撹乱坑（戦前以降か）が見られる。調査の結果、溝状遺構９条、土坑９基、建物跡３棟以上を検出した。

（１）溝状遺構

１号～４号溝状遺構は、調査区東で検出された。非常に不定型で壁面の立ち上がりも部分的に弱いところがあり、東西方向に流れる自然流路ではなかろうか。５号溝状遺構は、調査区東で検出され、３号建物の軸に並行している。ただ、調査区西に延びるものではなさそうである。出土遺物からみて近代以降のものと思われる。６号溝は調査区西で検出された。３号建物と軸方向を同じとするが、SP62に削平を受けるところで南東側に垂直に折れる。３号建物のSP63～SP65にも削平される。規模は幅約0.3m、深さ約0.2mである。７号溝は、調査区西で検出され、６号土坑を削平する。床面は平坦で、壁面は全体にしっかりしている。８号溝状遺構は調査区西で検出され、９号溝状遺構に削平される。９号溝状遺構は調査区西の中央部から南側に延び、途中で西に折れる。北端では幅２m～2.5mであったものがだんだん細くなり、西端では１m～1.5mとなる。床面は平坦に近いが、レベルはやや西側が低くなる。遺物は全く出土していない。１号～３号建物を構成する柱穴に削平される。

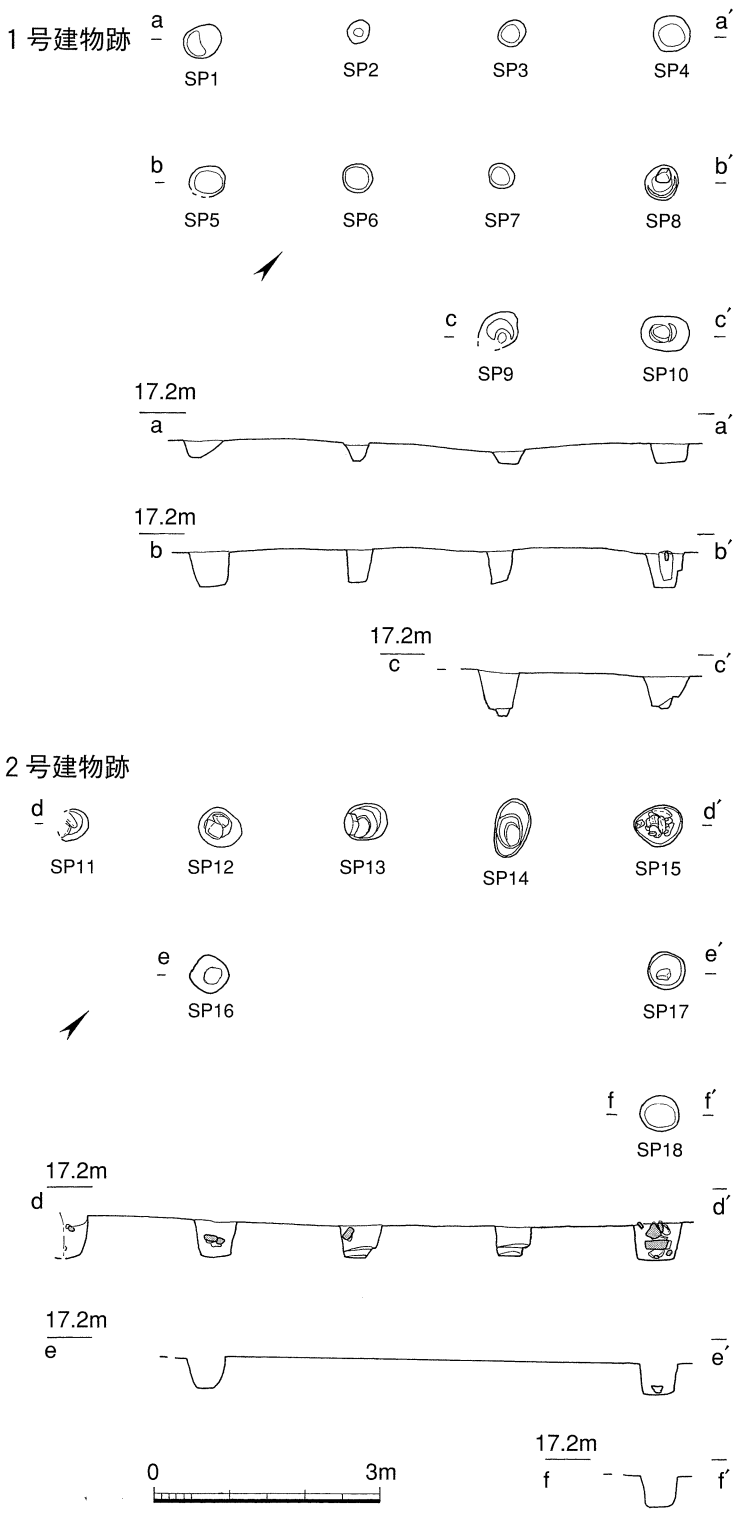
（２）建物跡

１号建物跡（第５図）調査区西側で検出された。SP1、SP4、SP8が９号溝状遺構を切り、SP7が８号溝状遺構を切る。SP1～SP4を主軸とするならば、その方向は北から東へ44°傾く。規模は２間以上×３間で、調査区域内では総柱の建物となる。柱間寸法はすべて２m前後で収まる。SP8は、長さ約40cmの棒状の礫が袖石状に入るが根石等は検出されなかった。

２号建物跡（第５図）調査区西側の１号建物跡と同じ場所で検出された。SP11、SP17が９号溝状遺構を切り、さらにSP18が８号溝状遺構を切る。SP11～SP15の４間を桁行と推定し、その軸の方向は北から東へ44°傾く。規模は２間×４間で調査区の関係上それ以上の規模になる可能性もある。柱間寸法は約1.6mで柱穴径0.6m前後となる。SP11～SP15はこの建物の北西端柱穴列にあたる。SP12は柱穴床面から0.1m上で20cm大の礫を中央に据える。SP15は床面に5～15cm大の礫を数個配しその

上に30cm大の平坦面を持つ礫を置く。さらにその上に20cm大の礫を配して遺構検出面と同レベルとする。隣のSP14からは礫の検出は無く対照的である。SP16～SP17の柱穴列は、SP13とSP14に対応する柱穴が検出されなかった。また、SP18列もSP14に対応する柱穴は確認されなかった。

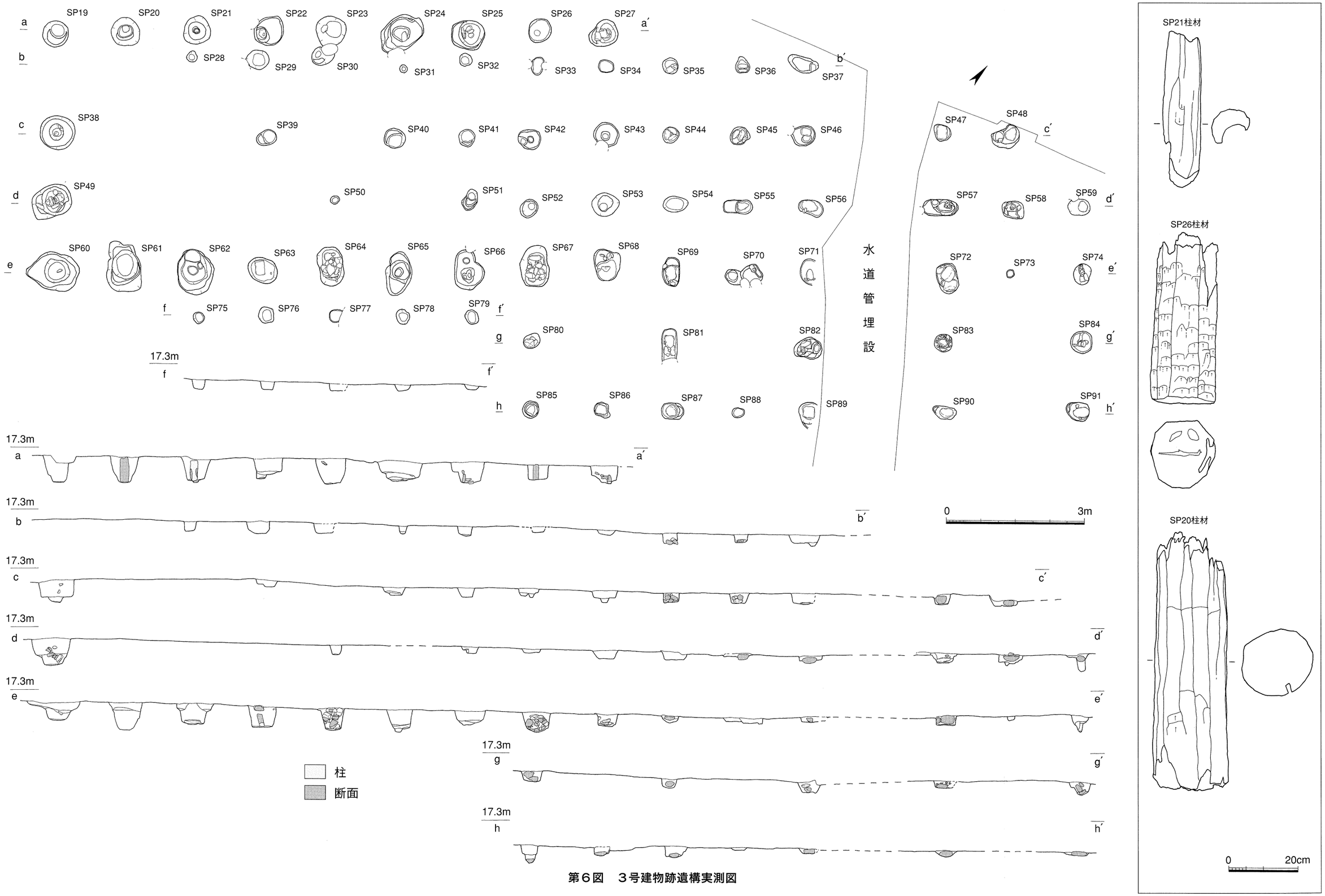
３号建物跡（第６図）調査区の東から西にかけて検出され、１・２号建物跡の北東側に位置する建物である。この建物の主軸は、北から東方向へ約43°傾く。運動場の南側にある街路に並行する。規模は、３間×15間を主体にして南東側に２間×８間分カギ状に拡がる建物である。さらに建物の南東側の一部と北西側で半間の規模で庇状に拡がる。この建物の南西端は染行SP19－SP60であり、逆方向の北東側は拡がる可能性がある。また、南東側に拡がる部分は、それ以上拡がることはない。柱間寸法は２m前後である。また、水道管埋設部分には柱穴がそれぞれ存在したと思われるが、未確認である。a－a′列の柱穴SP19～SP27は、b－b′列に対し北西側に半間分延びる部分である。SP27より北東側は調査区の関係で検出していないが、b－b′列に並行して延びるものと推測する。SP20とSP26では、柱穴の床面に直接置かれたと推定される柱材が検出された。SP20は径25cmほどで、SP26の柱材は径20cm弱で面取りがされていた。SP20とSP21とSP27は柱が検出された。SP27では礎盤石の上で柱痕を確認した。SP25は礎盤石（根石）と思われる礫は検出されたものの柱痕は確認されなかった。b－b′列はSP28～SP37を検出した。SP19に対応する柱穴は撹乱坑により削平されたものと思われる。SP20に対応する柱穴も検出されていない。SP35とSP36の床面には礎盤石の一部が検出されている。柱穴の規模はほとんどが径約0.4mである。c－c′列はSP38～SP48を検出した。SP20、SP21、SP23に対応する柱穴は検出されていない。また、SP46とSP47の間に在る柱穴は水道管埋設部分により未確認で



第５図　１・２号建物跡遺構実測図（1/100）

ある。SP44とSP45は20～30cm大の礫数点を配している。SP46とSP48は柱穴床面で30cm大の扁平な礫を検出した。SP47では厚さのある礫を１点置いている。ｄ－ｄ′列は、SP49～SP59を検出した。SP20～SP22に対応する柱穴は確認されていない。SP50とSP51の間に存在したと思われる柱穴は５号土坑により削平される。SP54～SP57は布基礎状の浅い溝を伴う。SP55とSP56は浅く、30～40cm大の扁平な礫を柱穴の床面に据える。SP57は長さ40cm大の扁平な礫を床面に据えており、その上から10cm大の礫数個が検出された。SP58は床面から0.05m上のところで厚さ15cm長さ45cmの扁平な面を持つ礫を据えている。SP59は床面からさらに深さ0.4mのピットを持ち、そのピットを上から塞ぐように30cm大の礫を据えている。ｅ－ｅ′列はSP60～SP74を検出した。SP63は幅約30cm、厚さ約15cmの切石が検出された。その検出状況は、柱穴中央に長さ40cmのものを立たせ、その直上に別の切石を寝かせている。埋土からは柱穴内で掘り返したような状況が認められることから。短期間で部分的に基礎構造を変更した可能性がある。SP64とSP67は20～30cm大の礫を床面から検出面まで積み上げている。SP64はその礫の最上位に平坦面を持つ礫を据えている。SP69は床面から0.1m上に長さ40cm厚さ15cmの扁平な礫を据えている。SP71長さ25cm程の平坦面を持つ礫を据えている。SP72は切石を置きその横に長さ40cm厚さ20cmの礫を据える。ｅ－e′列でみる限り、柱穴の切り合い等から２～３回程度の建て替えもしくは基礎部分の修理が為されている。SP73はSP72やSP74と比較して同規模ではないが、礎石のみを据えていた可能性もあり、それに対応するピットとした。ｄ－ｄ′列とｅ－e′列は、北東側に延びる可能性もあるが調査区外であり未確認である。ｆ－ｆ′列はｅ－e′列よりも南東側へ半間幅のラインにあり、SP75～SP79を検出した。すべて素堀のままで柱穴の規模は小さい。ｇ－ｇ′列は、SP80～SP84を検出した。SP68－SP86、SP70－SP88、SP72に対応する柱穴は検出されておらず、当初から存在しなかったのではなかろうか。それにより、柱穴間はそれぞれ２間分幅となる。SP80は柱穴床面に20cm大の礫を数個据える。SP81は扁平な礫を３点据えている。SP82は15cm大の礫を検出した。SP83は30cm大の扁平な礫を床面に据え、その礫の周りに５cm前後の礫を10点前後検出した。SP84は、15cm大の礫を数個床面から積んでいる。ｈ－ｈ′列はSP85～SP91を検出した。SP88以外は扁平な礫を床面に据えている。SP89は切石を使用している。SP90とSP91の間にも柱穴が存在したと思われるが、撹乱坑により確認できない。

建物全体の床構造は、染行SP24－SP65より北東側は総柱である。逆に染行SP20～SP61と染行SP21－SP22が対応する空間は柱が存在しない空間と思われる。また、ｇ－ｇ′列の各柱穴間も柱が存在しない空間である。このような空間は、床束のない床構造が考えられるが、三和土等の検出は無く土間であるとの断定は出来ない。この建物の基礎構造は、柱穴の床面に扁平な礫を使用して礎盤石としたものが主であるが、礫を積み重ねて基礎としたものや、逆に礎盤石等はなく素堀のままのものも存在する。また、柱穴は、ａ－a′列とｅ－e′列の南西側半分が大規模で、何れも深く掘り込まれている。建物の立地場所は高低差があり南西側が高い。そのため、上部構造だけを基準に礎石面等のレベルを定めるのではなく、地面の高低差を考慮しながら柱穴の深度や礎石のレベルを定める必要があったものと思われる。基礎に使われた礫は砂岩の自然石であるが、希に凝灰岩製の切石が確認される。柱穴で確認される切石は、塀等使われたものの転用と思われる。切石は、高岡の郷土屋敷で採用されたのが幕末といわれてはいるが、それ以前から地頭仮屋等で使われていたことは十分に考えられる。遺物は、この遺構及び周辺からは、丸瓦片が数点出土しただけである。瓦片が極端に少ないことから、屋根構造は茅葺き等の可能性が高く、瓦が使用されていたとしても玄関等の一部の箇所ではなかろうか。建て替えや修理等は、ｅ－e′列の切り合いでみる限り、基礎部分で３回以上行われている。



第６図　３号建物跡遺構実測図

（3）土坑

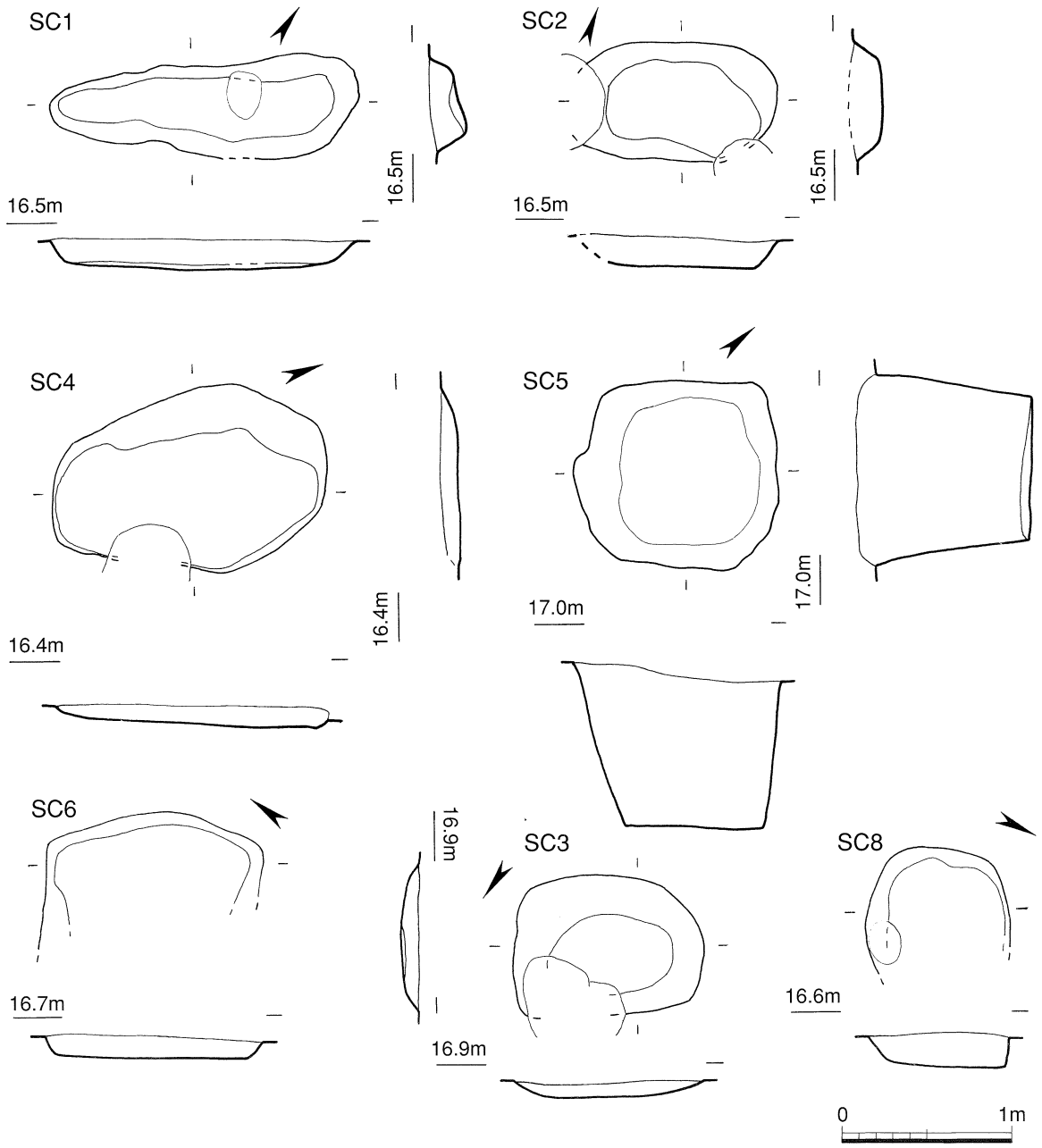
土坑は９基検出された。いずれも明確な出土遺物はなく時期決定が困難である。

１号土坑（第７図　写真図版４）調査区東で検出された。長軸約1.8m、短軸約0.6mの西側に先細りする細長いプランの土坑である。中央部でピットを削平する。床面はやや不安定で平坦面が少ないが、壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物の出土はない。

２号土坑（第７図　写真図版４）調査区東で、１号土坑の南側に位置する。遺構の西側を３号建物跡に関係する柱穴により削平される。長軸推定約1.2m、短軸約0.7mで、隅丸状の長方形プランである。床面は平坦で、壁面は45°の傾きで立ち上がる。遺物は出土していない。

３号土坑（第７図）調査区西で検出された。北側をピットにより削平される。壁面の立ち上がりは、残存状況が悪く不明瞭である。

４号土坑（第７図　写真図版４）調査区東で検出された。長軸約1.6m、短軸約1.1mの楕円形プラン



第７図　１～６・８号土坑遺構実測図（1/40）

で、東側をピットが削平する。東側の立ち上がりはほとんど確認できない。遺物は出土していない。

5号土坑（第７図　写真図版４）調査区西で検出された。主軸約1.1ｍの方形プランである。床面は平坦で壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は出土していない。

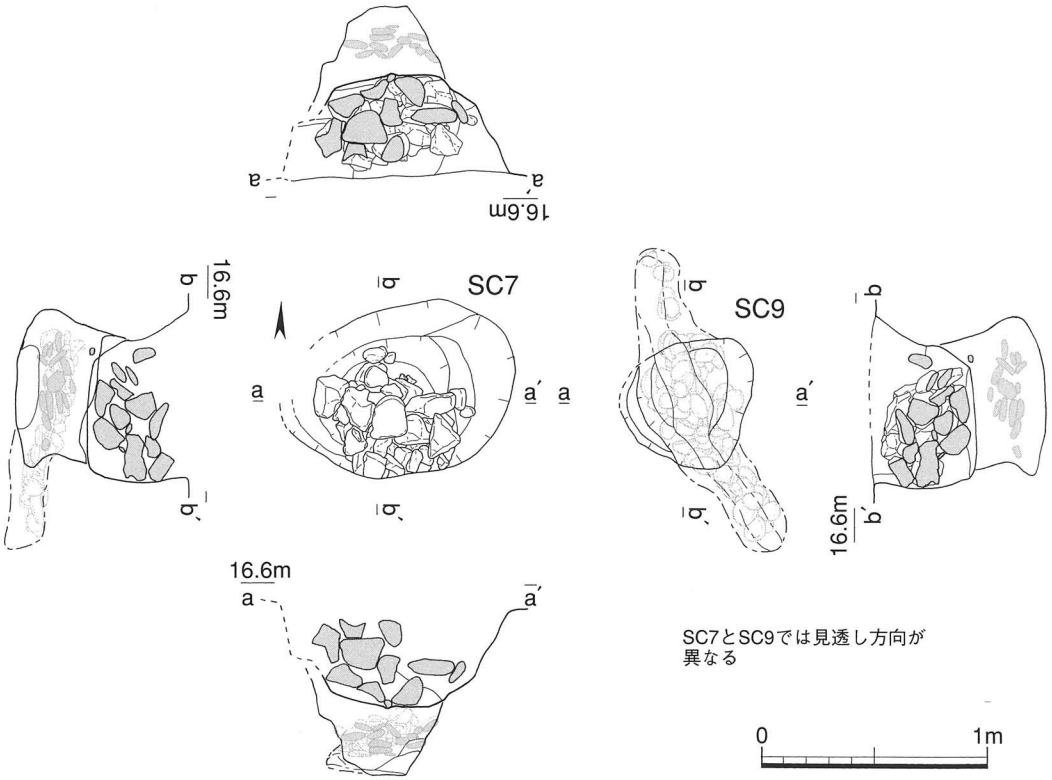
6号土坑（第７図　写真図版４）調査区西で検出された。号溝状遺構により西側を削平され東側のみ残存する。主軸約1.3ｍで、復元すると方形状のプランになるものと思われる。床面は平坦であり、壁面は、一部崩れるところがあるが東側はしっかりしている。

7号土坑（第８図　写真図版５）調査区西で検出された。９号土坑を大きく削平し、西側の一部をピットにより削平される。最大長約1.05ｍ、最大幅約0.75ｍの東西方向に主軸を持つ卵形プランの土坑である。床面は平坦に近く、床面プランが南東側に入り込むが、９号土坑の影響と考えられる。

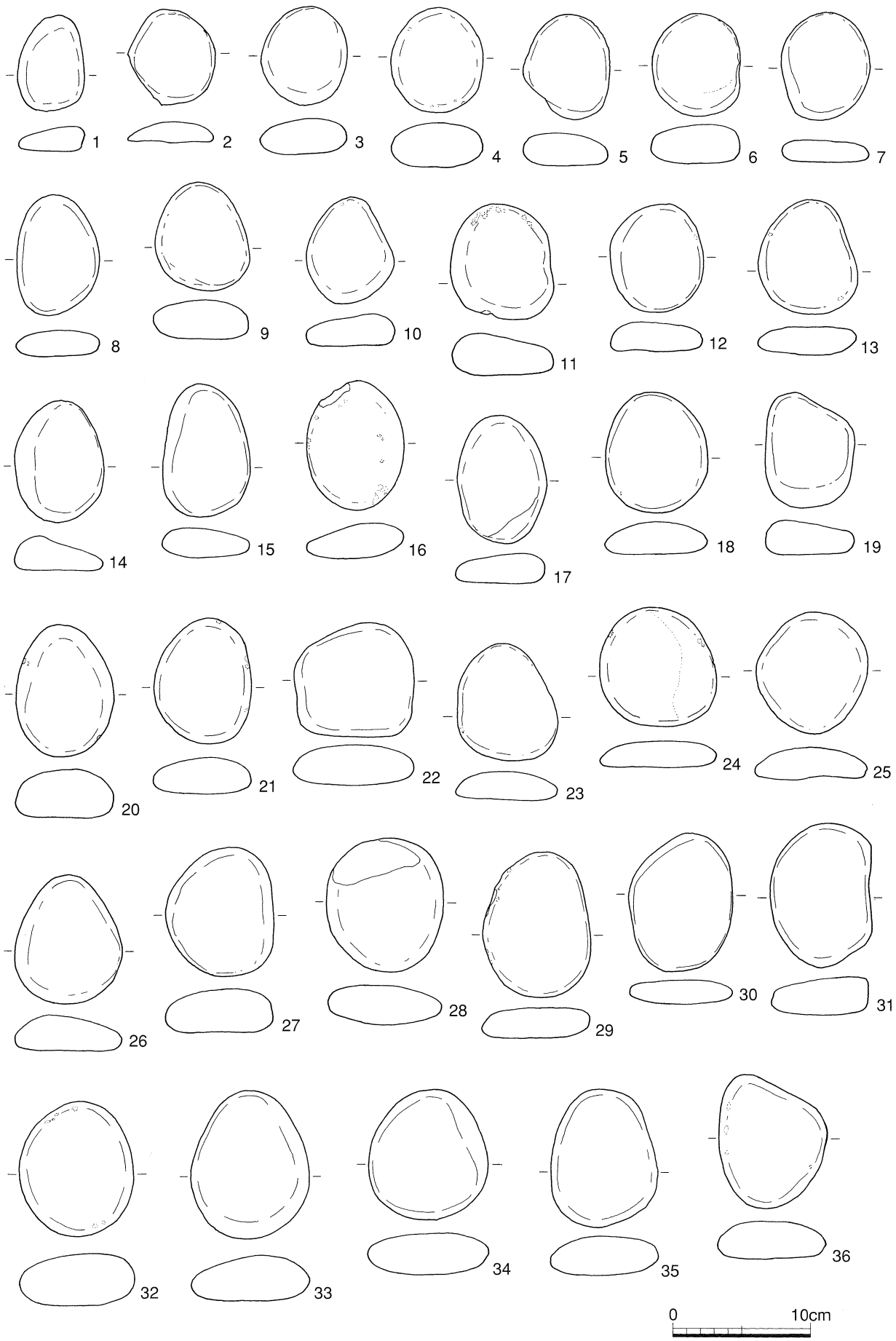
土坑からは、15～20cm大の角歴が南側に偏るように堆積している。これらの礫の堆積には規則性などはみられないが、最上部に20cm大の扁平な礫を据えている。この遺構は柱穴とも考えられるが、これに伴う他の柱穴は見当たらない。出土遺物は無いが、９号土坑よりは新しい。

8号土坑（第７図　写真図版４）調査区西で検出された。東側半分は水道管埋設部分に掛かるため不明である。幅は約0.8ｍで壁面はしっかりと立ち上がる。

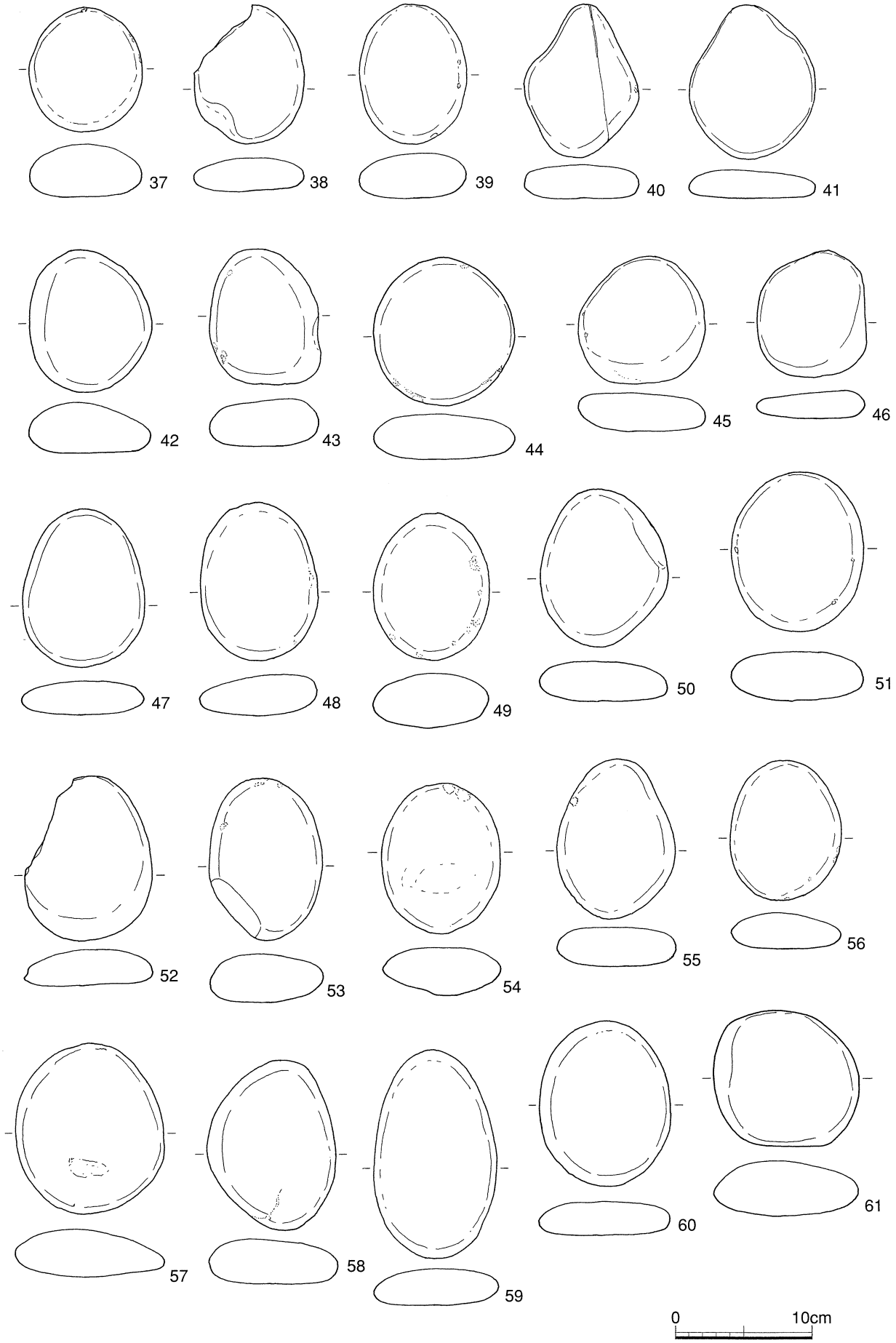
9号土坑（第８図　写真図版５）調査区西の７号土坑床面で検出された。７号土坑に大きく削平され、その真下にある。埋土は灰褐色粘性土で、床面近くで若干地山土が混入する。壁面は垂直気味に立ち上がるが、床面付近から北西方向と逆の南東方向にそれぞれ横穴がある。その横穴は、幅0.15～0.20ｍ、奥行き約0.5ｍ、断面は楕円形に近い蒲鉾状である。この遺構からは、扁平な礫が土坑中央から南東側に掘られた横穴の奥部にかけて重なって出土した。礫は72点出土し、ほとんどが砂岩質の扁平な円礫



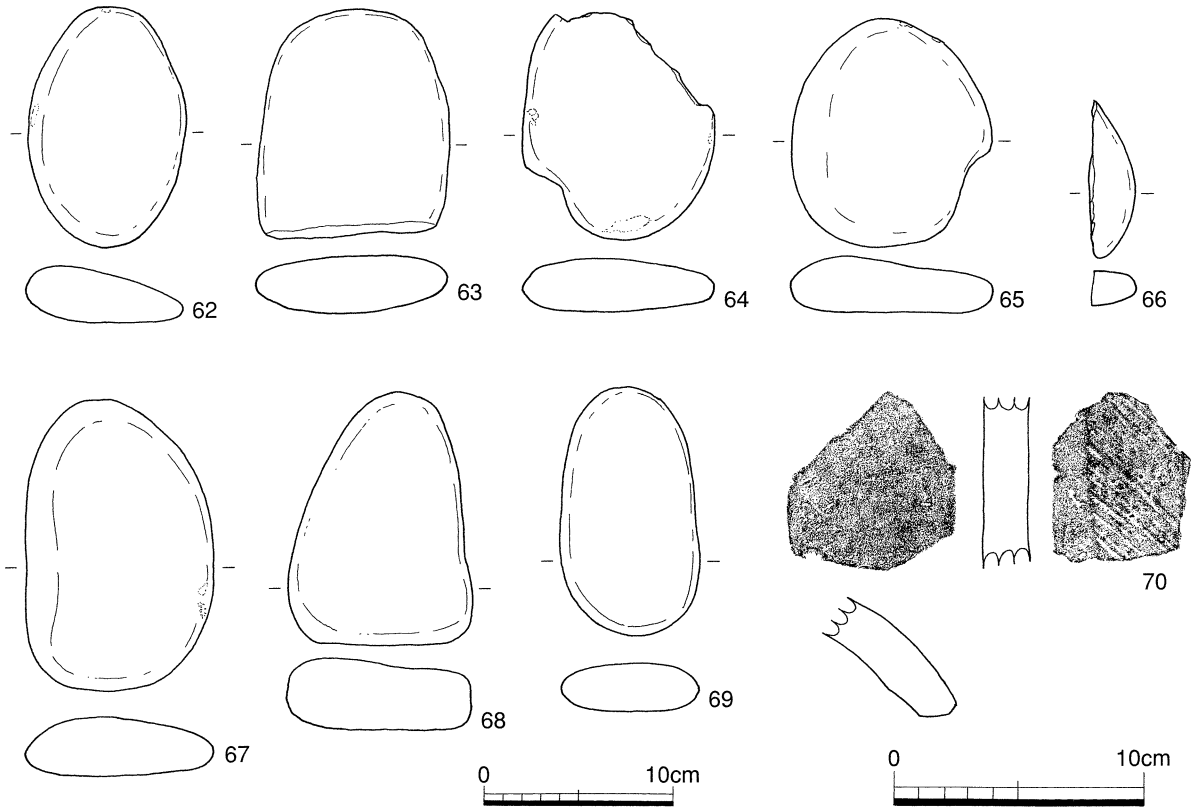
第８図　７・９土坑遺構実測図（1/30）



第９図　９号土坑出土円礫等実測図（1）



第10図　９号土坑出土円礫等実測図（2）



第11図　９号土坑出土円礫等実測図（3）

である。最大長6.8cm～18.2cmで平均10.1cm、最大幅2.4cm～10.8cmで平均値8.0cm、最大厚1.5cm～4.0cmで平均2.8cm、重量46ｇ～750ｇで平均342.3ｇ（何れも欠損した資料を含む）である。上下側面に敲打痕状の凹みがあるものもあるが人為的可能性は低く、目立った擦痕もない。北西方向の横穴の最奥部から土師器皿片と丸瓦片（70）が出土した。

この遺構は、７号土坑との埋土の違いや７号土坑の床面プランと９号土坑の壁面の立ち上がり位置が異なることから７号土坑とは別遺構と判断した。

表１　９号土坑出土礫観察表

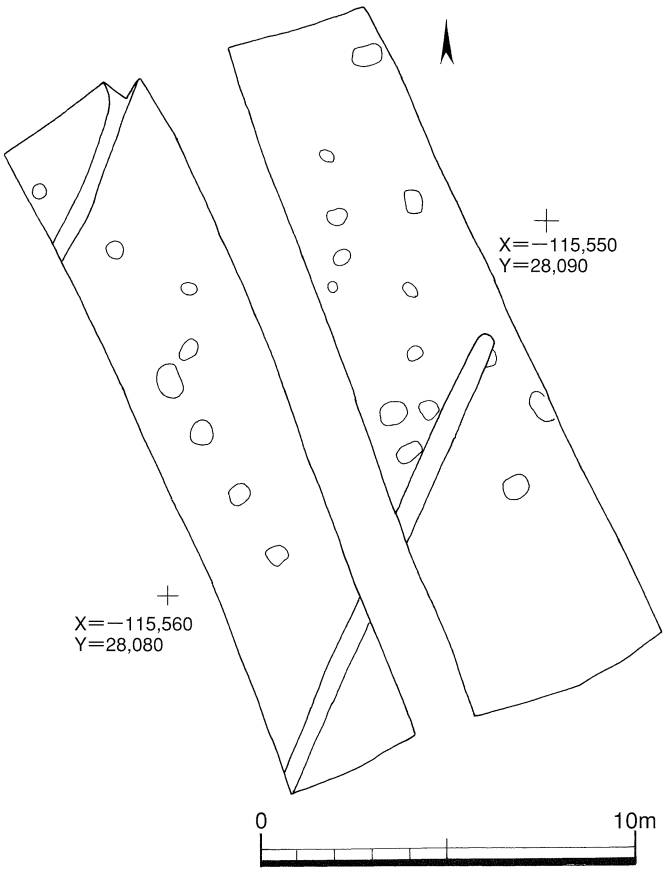
遺物番号	取上番号	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　　考
1	69	砂岩	6.9	4.9	1.9	94	
2	75	砂岩	6.8	6.3	1.5	92	やや赤化気味
3	1	砂岩	7.1	6.2	2.5	162	
4	23	砂岩	7.6	6.2	3.2	230	
5	25	砂岩	7.6	6.3	2.4	158	
6	18	砂岩	7.4	6.5	2.8	206	
7	34	砂岩	7.8	6.4	1.7	134	
8	36	砂岩	8.8	6.1	1.9	162	
9	一括	砂岩	7.9	6.9	2.8	226	
10	71	砂岩	7.8	6.4	2.3	148	破砕礫
11	46	砂岩	8.4	7.4	3.1	282	
12	58	砂岩	7.9	6.8	2.1	180	
13	51	砂岩	8.2	7.2	2.1	182	
14	57	砂岩	8.9	6.5	2.5	190	
15	35	砂岩	9.7	6.4	2.1	218	
16	53	砂岩	9.3	7.1	2.6	226	節理？
17	24	砂岩	9.3	6.5	2.2	196	
18	41	砂岩	8.8	7.5	2.4	224	
19	8	砂岩	8.3	6.4	2.5	206	
20	27	砂岩	9.6	7.1	3.7	360	
21	74	砂岩	9.2	7.1	2.7	258	
22	2	砂岩	8.3	8.8	2.9	348	
23	5	砂岩	8.5	7.3	2.1	178	
24	44	砂岩	8.7	8.5	1.9	216	
25	60	砂岩	8.8	8.2	2.4	220	
26	31	砂岩	9.4	7.8	2.6	264	

遺物番号	取上番号	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　　考
27	21	砂岩	9.4	7.8	3.2	356	
28	63	砂岩	9.6	8.4	2.9	376	
29	65	砂岩	10.5	7.8	2.2	300	やや赤化気味
30	32	砂岩	10.0	7.5	1.8	216	
31	55	砂岩	10.4	7.3	2.8	330	
32	56	砂岩	9.8	8.4	3.8	444	
33	47	砂岩	10.8	8.6	3.3	412	
34	66	砂岩	9.5	8.7	3.1	360	
35	67	砂岩	10.0	7.8	2.9	340	
36	42	砂岩	9.7	7.8	2.7	308	
37	16	砂岩	9.0	8.2	3.8	382	
38	19	砂岩	10.0	8.0	2.4	260	一部欠損
39	6	砂岩	10.2	7.7	3.2	380	
40	73	砂岩	11.1	8.3	2.5	320	
41	11	砂岩	11.3	9.2	2.1	298	
42	7	砂岩	10.2	8.9	3.7	470	
43	13	砂岩	10.0	8.0	3.4	440	
44	68	砂岩	10.7	10.3	3.3	530	
45	43	砂岩	9.3	9.2	2.8	350	
46	17	砂岩	9.2	7.9	2.1	220	
47	52	砂岩	11.4	8.8	2.4	370	
48	59	砂岩	11.4	8.6	3.1	420	
49	72	砂岩	10.6	8.4	4.0	505	破砕礫
50	38	砂岩	11.4	9.2	2.9	454	
51	48	砂岩	11.6	9.6	3.5	585	
52	29	砂岩	12.0	9.3	2.8	406	
53	45	砂岩	11.8	8.2	3.5	490	
54	50	砂岩	11.0	8.6	3.5	434	劣化が激しい
55	40	砂岩	11.6	8.6	2.8	436	
56	12	砂岩	10.1	8.0	2.6	308	
57	37	砂岩	12.5	10.8	3.5	630	
58	26	砂岩	12.2	9.3	3.2	530	
59	70	砂岩	15.1	9.0	2.6	555	
60	4	砂岩	12.1	9.6	2.5	456	
61	20	砂岩	10.0	10.5	4.0	585	
62	39	砂岩	12.7	8.3	3.0	390	
63	3	砂岩	12.2	10.1	3.1	625	
64	14	砂岩	12.0	10.2	2.8	452	一部欠損
65	28	砂岩	12.1	10.6	3.0	545	
66	54	砂岩	8.4	2.4	1.9	46	破砕礫
67	30	砂岩	15.4	10.1	3.1	750	
68	49	砂岩	13.3	9.8	3.8	785	
69	10	砂岩	18.2	7.4	2.6	408	

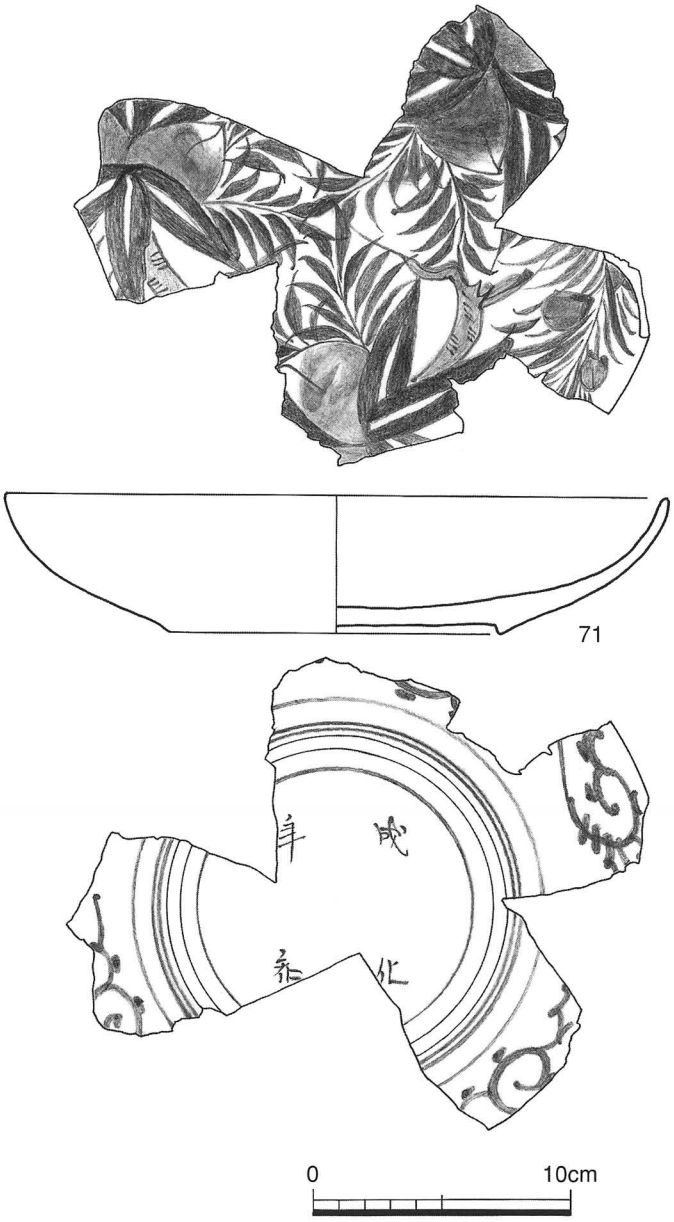
2　第２区の調査

この調査地は、１区の南側に位置し、新校舎の玄関付近にあたる。高岡における薩摩藩の教育施設（高岡小学校の前身）である「錬士館」が地頭仮屋の門を入って左側に位置していたと伝えられている。この錬士館は武道場などいくつかの部屋があったとされるが、このような施設の確認も含めて、調査区を設定した。

調査の結果、調査区を南北方向に暗渠排水施設が入り、ピットが二十数基検出された。ピットの径は05m程度が多く、第１区と同じである。いずれも、礎石や根石等の構造は無く、規則性も見当たらない。この調査区からは、遺物は出土していないが、調査区西に隣接する確認調査トレンチからは、伊万里焼の染付皿(71)が出土している。



第12図　第２区遺構配置図（1/200）



第13図　出土遺物実測図

この遺物は、錬士館（幕末期）とは時期が異なるものの、それ以前から何らかの施設の存在が伺える。

第３節　文献史料

1　文献史料に見る地頭仮屋

（1）地頭仮屋の役割

地頭仮屋は、薩摩藩で直轄外城の政務の責任者として任命される地頭の詰所である（私領にあっては領主仮屋）。各外城の麓集落（武家集落）の中心に立地し、外城郷士役である郷士年寄や書役等の勤務所もその内に置かれた。

地頭は、江戸時代初期は勤務地である外城の地頭仮屋に詰め、その政務にあたっていたが（居地頭または移地頭）、次第に居宅のある鹿児島に居ながら外城の政務を行うようになっていった（掛持地頭）。「列朝制度巻之六」（『藩法集　鹿児島藩』）によれば、「古代は一所一城有之、地頭・領主其地ニ被召置、守城被仰付、御治世ニ相成候ても、一所衆は勿論、地頭迚も其地ニ罷在、一所致支配候処、寛永年間居地頭御引取相成、御城下へ相詰、掛持相成候」とあり、寛永年間（1624～43）に居地頭から掛持地頭になったことがわかる。

高岡では、初代比志島国貞（在任1600～20）、2代比志島国隆（在任1620～28、国貞子）までは居地頭、３代島津久元（在任1628～33）からは掛持地頭となっている。しかし、隣の穆佐では、8代伊地知重商（在任1649～61）まで居地頭となっており、外城により、掛持地頭への移行時期に差が見られる。

地頭仮屋は、地頭の詰所・郷役の勤務所であると同時に、藩主をはじめとする藩の重職にある者の宿泊所としても使用された。特に、藩主の江戸参府や国入りにおいて、東目筋（日向国方面）を通行する際には、ほとんどの場合、高岡の地頭仮屋が宿泊所として使用された。

藩主等が参勤交代や巡見などのため、高岡を通行した記録を以下に列挙した（「高岡名勝志」、横山家文書「入田氏記録」より）。

①元和元年（1615）島津家久（藩主、大坂へ出陣）②寛永13年（1636）島津光久（藩主世継ぎ、参府）
③万治３年（1660）島津綱久（藩主世継ぎ、参府）④寛文11年（1671）島津綱貴（藩主世継ぎ、参府）
⑤延宝元年（1673）島津光久（藩主隠居、参府）　⑥元禄9年（1696）島津吉貴（藩主世継ぎ、参府）
⑦正徳元年（1711）島津吉貴（藩主、参府）　⑧享保7年（1722）島津継豊（藩主、家督国入り）

⑨宝暦３年（1753）島津重年（藩主、参府）　⑩明和4年（1767）島津重豪（藩主、参府）
⑪弘化２年（1845）島津斉興（藩主、巡見）　⑫嘉永6年（1853）島津斉彬（藩主、巡見）
⑬文久３（1863）島津久光（藩主父、国入り）

これによると、藩主の高岡筋通行が、18世紀半ばまでは、各代に１、２度の割合で行われていることがわかる。しかし、明和4年の島津重豪の通行以後、幕末の弘化２年まで藩主の通行は行われていない。

（２）地頭仮屋の配置

高岡には、文久３年（1863）４月に書かれた平面図「御仮屋麁図」がある。この図面は、文久２年、江戸からの帰途に生麦事件を起こした島津久光の行列が、鹿児島へ帰国途中に高岡筋を通行するため、諸役人の座敷割を記したものである。

図面には、建物西側に大広間・御道具結髪所・時触詰所・所用聞詰所の4部屋、東側に家老・目付役・御使番・御側用人の座と記された３部屋が並び、その北側に御膳所・茶道部屋など３部屋が配置されている。また、大広間の北側には、配膳部屋・台所がある。番所、高岡の役人の詰所、便所などについては、別棟となっている。仮屋の建物の南側には恐らく庭園であろうと推測される広場があり、さらに南側に「士踊り」と呼ばれる高岡武士たちの踊りが披露される広大な敷地があり、その勢揃いを見分する桟敷が設けられている。そして、さらにその南側には、「御馬見所御桟敷」と記された建物があり、仮屋馬場が東西に広がっている。

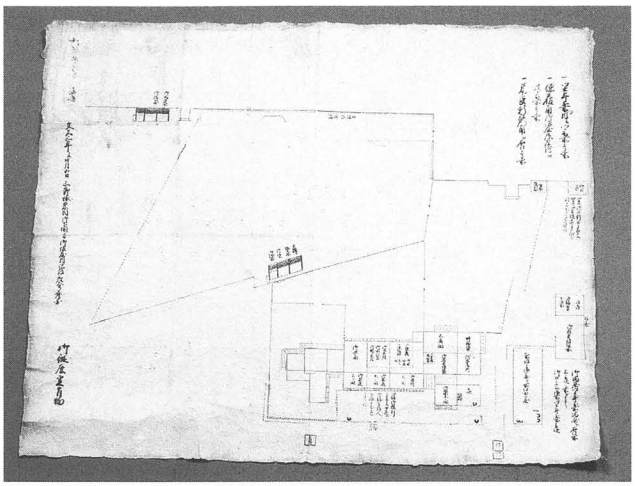
ところで、嘉永６年（1853）の藩主島津斉彬巡見の際の記録には、斉彬は、12月４日から７日までの４日間、地頭仮屋に宿泊したことが記されている。そして、７日には、10時頃より「御馬見所」の桟敷に入り、高岡武士たちの「馬寄」を見物、正午頃からは桟敷に入り、「士踊り」や剣術・柔術・弓術などの武芸を見物している。建物内部に関する記述はないが、士踊り・武術を見物する桟敷、馬寄を見物する桟敷については、藩主逗留時の御仮屋の用途として、前述の文久３年の図面に符号している。

幕末になると、地頭は再び任地へ赴く居地頭となり、高岡へは、慶応２年（1866）、名越時敏が関外四ケ郷（高岡・穆佐・綾・倉岡）を統括する地頭として任命された。時敏が逗留した地頭仮屋について、彼が残した日記には「八ツ後鐘楼へ遠望鏡持登り諸所遠見す、厳壁高キ所小キ社など見出ス、夜入鐘つきの肥後九左衛門召出、酒共為給候」と記されている。図面には、「時触詰所」という記載があるが、地頭仮屋の敷地内には鐘楼があり、「遠望鏡」で見れば、かなり遠くまで見渡せたということがわかる。

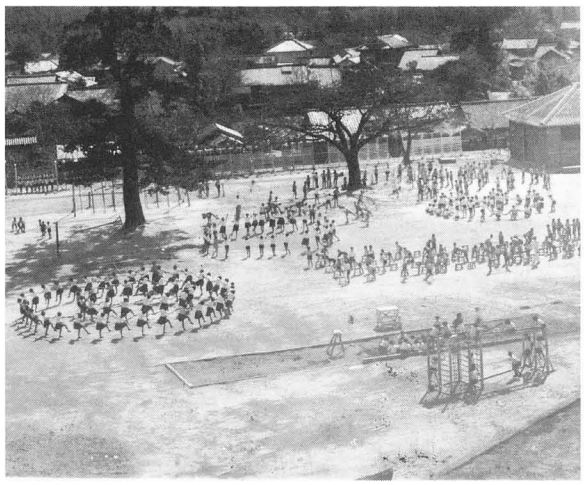
最後に、『高岡郷土史』（昭和７年）の記述を、当時の面影を慮る史料として以下に紹介する（写真は、昭和14年頃の高岡小学校の運動場の写真。中央に『高岡郷土史』に記される松の老木が見える）。

「即ち高岡の御仮屋は、城山の南麓、今の高岡小学校の在る所なりしも、今は其の敷地を拡張し、且東南面の低地を盛上げたる等、又昔日の観を呈せざるも、只松の老木は亭々として高く聳え、星霜幾百年、往古の繁栄と威風とを物語りつつあり。（中略）御仮屋の正門は古風堂々たる観音開きの大門にして、其の位置は今の松の老木より南に数間の線を引き、直角に西に数間を距てたる所、其処にある栴檀の老木は門内西側に植えられたるなり。而して右正門の西側に隣接して守衛所あり、又其西に接続して直に白亜の倉庫あり、其西側に謂ゆる勝手門を有し、年寄、書役の勤務所に至る。御仮屋の正門を潜り七八間を距て突当りに八畳の玄関間あり、其の西に八畳の間、東に数十畳の大広間、続きて八畳又は、十畳位の一間ありて、直に領主の御座の間、其次に御家老座あり。諸役の詰所、下級役の詰所、賄所便所等は御座の間御家老の北側城山の方に設けられ、鐘突堂は今の運動場西側に当る山上学校建設記念碑の付近にありたり、又御仮屋の屋敷は一段高く、土手の上には白亜の塀を築きて南面及東面を囲み、

（中略）尚御仮屋正門の前は末広の階段にして低地広場は調練場に充てられたり。」



文久３年「御仮屋麁図」（天ヶ城歴史民俗資料館所蔵）



高岡小学校の校庭（昭和14年頃）

Ⅲ　まとめ

調査において検出された遺構について、所見を述べてまとめとしたい。

１区は地頭仮屋の建物の存在を想定した調査区である。そこで検出された３号建物跡は大規模な建物であり、その可能性があるが、明確な時期はわからなかった。

この建物の平面構造について、文久３年の「御仮屋麁図」と比較してみると、そこに見られる間取りとは異なっている。この「御仮屋麁図」が実際の建物に基づいたものであれば、この時期の地頭仮屋ではなさそうである。次に、基礎構造であるが、この3号建物の基礎構造は、柱穴の遺構検出面よりも低いレベルで検出される礎盤石等を伴うものである。例えば、幕末期に推定される二見家住宅(座敷部分)は、藩主の休憩所として使用されており、地頭仮屋と似た機能を担う。その去川二見家住宅の基礎構造を見ると地面に礎石が露呈しており、３号建物とは若干異なった構造である。また、近世の遺物は、19世紀代の遺物を中心に若干出土した程度であるが、何れも3号建物に伴うものではない。ただ、17世紀代の遺物の出土は認められないことから、初期段階からこの場所に地頭仮屋が存在しなかった可能性もある。　高岡地頭は17世紀前葉と幕末を除けば地頭の赴任は確認されていない。もし、地頭仮屋が生活空間ではないとするならば、遺物が出土しないのは当然かもしれない。しかしながら、鹿児島市郡山に所在する地頭仮屋跡は、継続的に遺物が出土している。藩内における地頭仮屋の用途が外城ごとで異なっていたのかどうかはわからないが、何れにしてもこの検出された建物範囲は陶磁器類を使用しない空間(施設)の可能性がある。この調査区辺りには明治期に小学校の校舎が在ったことから、その可能性も否定できない。しかし、基礎構造から見る限り明治期のものとは考え難い。

今後、地頭仮屋跡を明確にしていくには、調査地北側の旧校舎跡地や新校舎東側での再確認、また、すでに調査が終了した11地点(未報告)で検出された建物跡を検討する必要がある。

土坑については、9基を確認した。その中の9号土坑においては、土坑床面直上の両側壁に横穴を掘り70点ほどの扁平礫を伴うという特異な遺構である。祭祀遺構とするには根拠に乏しく類例を重ねながらの検討が必要であろう。

写真図版

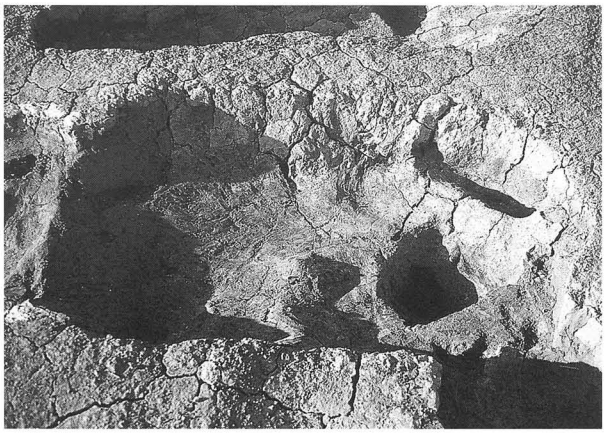
高岡麓遺跡中心部

第1区全景

図版4

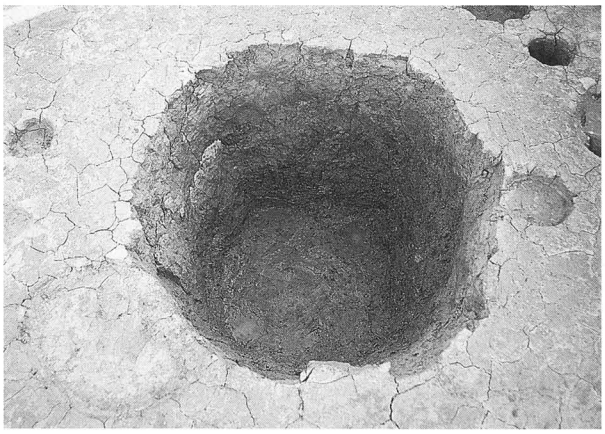
第２区全景
（北から）

１号土坑

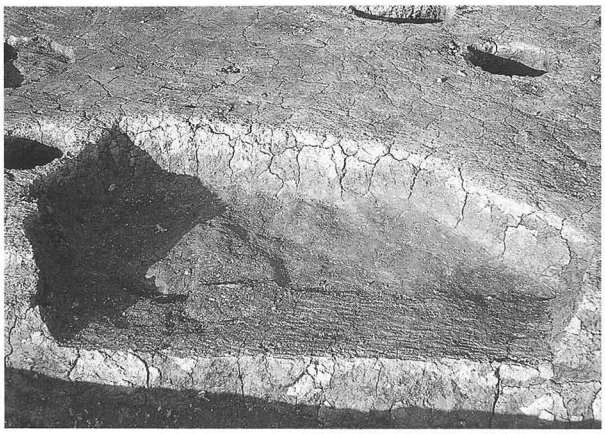


２号土坑

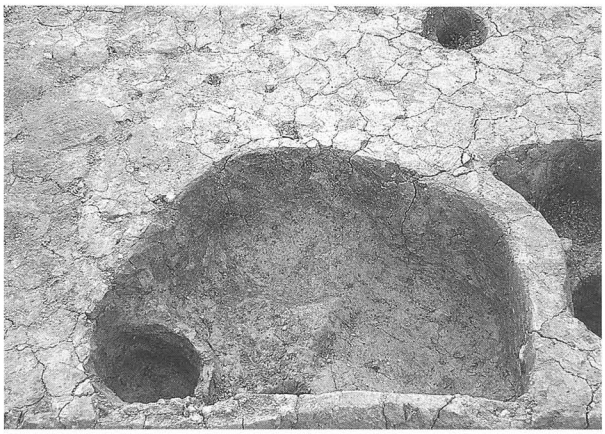
４号土坑



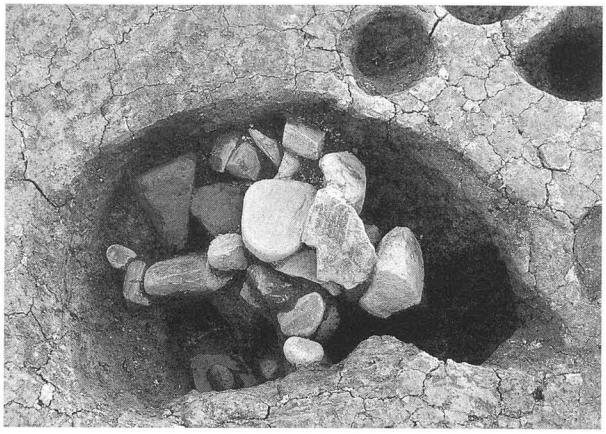
５号土坑



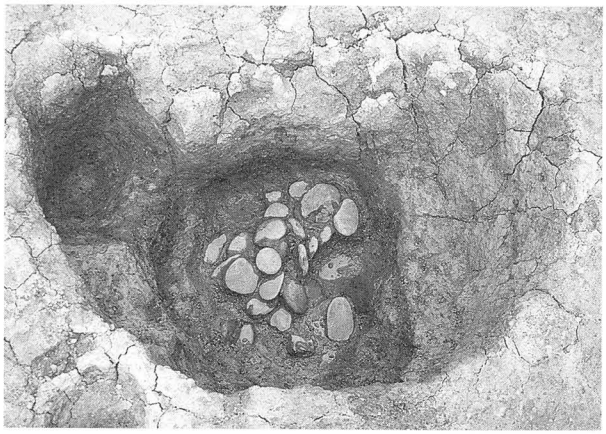
６号土坑



８号土坑



7号土坑（北から）



9号土坑（南から）

表2　報告書登録抄

フリガナ	タカオカフモトイセキ
書名	高岡麓遺跡（25地点）
副書名	高岡小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第63集
編集者名	島田正浩
発行機関	宮崎市教育委員会
所在地	宮崎県宮崎市橘通東１丁目14番20号
発行年月日	2006年３月31日

収蔵遺跡名	所在地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高岡麓遺跡 25地点	宮崎市高岡町内山 2899-1番地	45 201		31° 57′ 14″	131° 17′ 57″	2004.7.26 ～ 2004.11.29	930㎡	学校建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物				特記事項
散布地	中世～近代	土坑 建物跡 溝状遺構		土師器皿、瓦、中近世陶磁器				

宮崎市文化財調査報告書　第63集

高岡麓遺跡（25地点）

発　行　日　　平成18年３月31日
発　　行　　宮崎市教育委員会
〒880-0805
宮崎県宮崎市橘通東１丁目14番20号
TEL. 0985-21-1836